

「歴史画」としての清少納言図 — 「香炉峰の雪」の章段の絵画化をめぐる—

多賀 緑（京都工芸繊維大学）

平安時代中期を生きた歌人、清少納言を描く現存する作例の多くは、『枕草子』「香炉峰の雪」の章段に基づく御簾を巻き上げる姿で表現されてきた（以下「掲簾図」とする）。「香炉峰の雪」の章段は、清少納言の仕える中宮定子が「香炉峰の雪はいかがか」と尋ねたところ、「香炉峰の雪は御簾をかかげて見る」という白居易の詩の一節を根拠に定子の御前で御簾を巻き上げて応えたというエピソードに基づくもので、清少納言が機知に富む賢い女性であることを如実に示す章段として知られる。本発表は、清少納言像のほとんどが「掲簾図」を定型として絵画化されてきたという浜口俊裕氏の指摘をもとに、近世の儒教思想の影響を受けつつ近代国家の成立へと向かう時代背景のなかで描かれた「掲簾図」の系譜を整理し構図やモチーフを分析することによって、本図が「歴史画」として成立していく過程について明らかにするものである。

「掲簾図」による清少納言図の成立は、儒教思想が奨励された17世紀に遡る。女訓書である『女郎花物語』（1661年刊）には「掲簾図」を伴い清少納言の香炉峰の故事が描写されており、まさに「才媛賢女」のあり方が世に広く示された。このような時期の作例としては、土佐光起《清少納言図》（東京国立博物館蔵）や清原雪信《清少納言故事図》（プライスコレクション）などを挙げるができる。その後、琳派や復古大和絵、浮世絵など流派を越えていくつも作例が残されているが、幕末から明治にかけて「掲簾図」は爆発的に増加する。近代国家における教育のなかで皇国史観に基づく歴史認識のための「歴史画」がさかんに求められ、「賢女」としての清少納言の図像は「歴史画」の恰好の画題となった。明治期の「掲簾図」は、川端玉章や小堀鞆音、榊原文翠、谷口香嶠、上村松園らの作例を見出すことができる。これらを江戸時代の作例と比較すると、遠景の山水表現などの情景描写は省かれ、御簾を巻き上げる清少納言のみが抽出されており、装束や御簾の文様などの細部描写には、古画からの引用とともに有職故実に基づく考証的な態度を指摘することができる。例えば上村松園《清女褰簾之図》（1895年、北野美術館蔵）では、人物表現は光起の作例など古画を参照しつつも、装束は中宮の御前であることにふさわしい唐衣裳に有職文様、御簾には伏蝶や窠文が精緻に施され、御簾越しに雪化粧した竹を配す図様で、御簾を巻き上げる清少納言の姿に重きが置かれている。

清少納言の「掲簾図」が「歴史画」の好画題であったのは、近世までの儒教思想が近代の道德教育に引き継がれていくなかで、清少納言が重要な女性であり婦徳の鑑として仰がれた背景にある。そこで求められた「歴史画」としての清少納言図は、物語性よりも有職故実や史実に重きを置いた清少納言像であったと考えられる。